

# ◎都市景観から風景へ向けて

■金丸壽男

## 1 記憶の中の横浜

子供の頃の記憶というのは、まことに曖昧なものである。記憶というと、輪郭のとてもはっきりした像を思いうかべるけれど、むしろぼんやりとしたさまざまなシーンが不連続な断片となって、頭の奥に地模様をなして沈みこんでいると言った方が私にはピンとくる。子供の頃を振り返るということは、その不連続な断片を、今という時間の中で編み上げていくことで等身大の像を結ぶ作業にほかならない。

かつての子供たちにとって、遊びはもっぱら外の空間と結びついていた。カン蹴りやかくれんぼ、めんこにビー玉にベーゴマ。これらの遊びはいつも近所の路地が舞台であった。家と家のわずかな隙間や、他人様の裏庭、電信柱や垣根の裏がわ等など、隠れる場所として絶好のポイントが幾つも用意されていた。また多少のギャラリーが集まる路地であってこそ、日ごろ磨いた腕の見せ所とばかり、メソコを持つ手にみんな力が入ったものである。

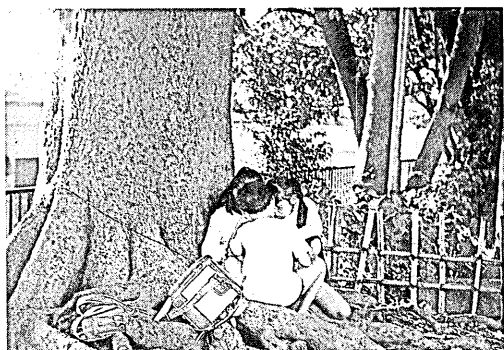
路地は向こう三軒両隣のな世界の延長上であり、近所の人たちの気配をいつも感じることでできる場所であることで、外というよりも内の空間であった。しかし当時の遊びは近所の路地だけで練り広げられていたわけでもなく、その範囲は子供心にもかなりの広がりを持つていたようである。

当時はまだ放置され埋め残されたままの防空壕というものがいくつか残っていた。筆筒の引き出しをひっくり返して、ローソクを捜し出し、探検と称して皆で自転車にまたがり、浅間台の坂を登り、斜面にあげられた防空壕へバラ線をかいくぐって入り込む。進むほどに深くなる闇と湿気を含んだゆるい空気。恐いのを我慢してさらに進むと、突き当たりにはポツカリと穴があいていて、そこから岡野や東海道線の線路越しに平沼から戸部の丘まで見通せる風景が広がる。隠れた眺望の場所にいることの爽快感は今でも強烈な印象を刻んでいる。むろん帰りはまったく恐ろしくない。また私の生まれたあたりは、埋め残された運河にぐるっと囲まれた場所でもあった。す

でこの川は運河としての本来の機能は停止し、河底は上がり、底に堆積した泥をすく上げる浚渫船の他に動いている船というのをあまり見かけない。護岸に係留されたハシケと運河沿いにあった材木問屋の原木のイカダが水に浮かんでいる風景が記憶の中にある。そして運河は大人たちが考えるような有用・無用のレベルではないところにあつた。「かわつぶち」、こう呼んでいた場所は私たちにとってかっこうの遊び場であり、そこには危険と背中合わせの魅惑的なからっぽの空間が広がっていた。「かわつぶち」の護岸の上を風を切って疾走する痛快さ、イカダの上で飛び跳ねる時の柔らかな不安定さ。遊びのどれもがゾクゾクするほど楽しかった。

大人たちはこれらの遊びを禁止する。しかし禁止があることをかいくぐって行こうと、この遊びの楽しみはいっそう倍加される。ダボハゼ釣りの兄にくつついて高島の岸壁に出かけ、網でクラゲをすくい上げ、拾った空缶に入れる。クラゲは陽にあたると溶けて無くなると誰かが言った言葉を試してみよう

寄り道の場所



- 1 記憶の中の横浜
- 2 横浜の発見
- 3 横浜の地形と街形成
- 4 空間の縁（ふち）
- 5 景観から風景へ

と、日向の護岸に置いて待ち続けた時間。高島の棧橋から眺める港は、人や物がまだまだ動いていたような気がする。そして棧橋や岸壁は、見知らぬ世界への発着地として不思議な魅力を持つ場所でもあった。

当時の横浜には現に見知らぬ異界も存在していた。山下公園を過ぎ、麦田のトンネル（山手トンネル）を抜けたとたんに広がるもう一つの世界。フェンスに囲い込まれた接収地の内のアメリカの生活風景である。生まれ育った近所の路地や住まいとまったく異なる風景がそこにはあった。刈り込まれた芝生の中に一戸建ての住宅が点々と置かれ、広がりを感じさせる風景。陽の光のまぶしさ。フェンスにかけられた看板の上に無造作にペンキで描かれたアルファベット。私の生まれ育った足元と地続きである事さえ忘れさせてしまふような風景がそこに広がっていた。

こんな私の中の横浜も、社会と向き合う大人になるにつれ断片化され地模様をなし、記憶の隅へ押しやられてしまった。そして現実の都市横浜も自分の成長と足並みを合わせるかのように大きく変化していった。

## 2 横浜の発見

今から十年ほど前になるだろうか。「横浜学を考える会」へのお誘いを事務局で尽力されている鈴木隆氏より受けた。「横浜学？、考える？？」などといくつかの疑問符を打ちながら参加してみた地域学の集まりである。今でこそ地域学という言葉は自立し社会に定着した一つの言葉となっているが、当時はま

だ耳新しく、さらにそれを考えるとはいったい何だろう、と好奇心だけで出かけていった集まりであった。

建築を学び、教育の場で仕事の糧を得ている私にとって、都市横浜とそこに建つ建物は、どこか対象としての景観であり建築であったような気がする。ところがこの会に参加する多くの方たちにとって、一つの興味を糸口に探り当てていった横浜を語ることは、自分の夢を語ることに同一であるかのような熱心さにあふれていた。そしてその間口の広さにも驚かされるばかりである。横浜をめぐる、人・物・事・場所が毎回のテーマの中で切り取られ、幾つもの横浜が浮かび上がってくる。鈴木氏の「木も見て森を見る」会でもあり、「学は楽」に通じるものといった言葉が重なり合うことで、地域学の意味も多少分かってきたような気がした。そして自らの内にある横浜を考えるのだと一人で納得し、この広がりの中に参加させていただくことになった。多くの個性と、思慮の深さ、視野の広がり、曾祖父までのルーツをたどることで内なる横浜を語る人々など。この会の中で、横浜の時間は遡行し、共有され、共振し、会終了後アルコールが入った話にも華が咲く。それぞれが「発見の場」として会を位置づけ連携することで、さらにそれぞれの思いを掘り起こしていく。会を通してうかがい知れてくる多様な横浜像を前に、耳学問の始まりであった。しかし聞き役ばかりではこの会は成り立たない。「横浜学を考える会」では、会員自らが発表者でもある。

何かテーマをつくって発表してみませんか

と声が掛り、当時所属していた研究室の高木先生とともに発表の機会を持った。「横浜の運河」と題し、七〇年代半ばから行っていた運河景観の定点観測を下敷きに、運河と街形成の関わりについて整理を行ったものである。七〇年代から横浜の中心地の景観は、運河も含め大きな変化を上げていった時代である。社会的には環境問題が深刻化し、自然との共生や調和が語られることでエコロジーという視点が加わり、人間にとって望ましい環境を模索することで環境デザインという言葉が使われるようになった。また都市を景観の観点から語る視点も誕生する。

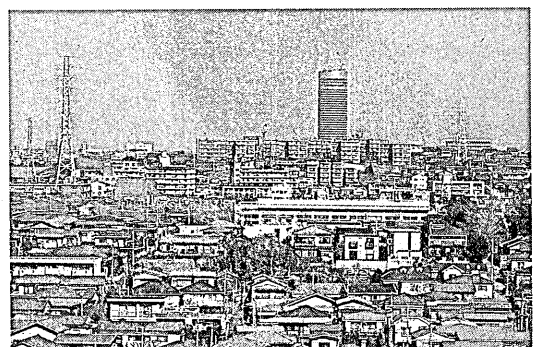
そんな時代と身の回りの状況や私自身の興味を反映してか、これ以降「横浜学を考える会」で行った数回の発表すべてが、道やウォーターフロントの景観と風景をめぐる事柄に終始している。景観をキーワードに都市横浜を対象化し、さらにそれを生活者の視点から風景へと定着させていくにはどうしたら良いのだろうかといった漠然とした問いと模索である。そしてまた「横浜学を考える会」との出会いには、私の記憶の底にあった「風景の発見」という機会をももたらした。

## 3 横浜の地形と街形成

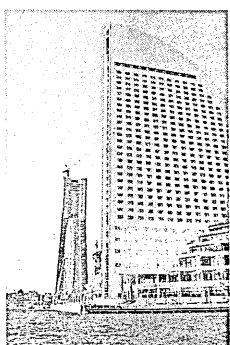
景観を構成する要素を考える上において、決定的に重要な要因として地形があげられる。特に横浜はこの地形的な特徴が街形成の方向を決定づけるとともに景観の骨格にも大きな影響を与えている。

嘉永六年、浦賀沖に現れた黒船をきっかけ

丘を突き抜けて顔を出す建物



海から眺めた「みなとみらい21」



に、開港をめぐるどこに港を開くかのやりとりも、幕府にとって地形を利用し東海道という大動脈からいかに隔離し、港と居留地を開設するかが問題とされた。また、現在の関内地区と横浜駅周辺地区は、かつての「入り海」と「袖ヶ浦」と呼ばれた二つの入り江を埋め立てた所でもあり、地形的には別々のまとまりを持つ場所である。今でも二つの市街地の間に、掃部山公園をかかえる戸部から野毛へ至る丘陵が張り出し、境をなしている。この丘陵の前面を面的に埋め立てることで、それらを繋げ一つの都心を形成するため「みなとみらい21」の開発が進んでいる。港に面し二つの地区を連結し面的なまとまりを形成するための人為的地形操作ともいえる。

横浜の特徴を一口で言いあらわすのに「丘と海の港街」という言葉が良く使われる。この流通している横浜のイメージ、丘と海について地形の観点から概観してみよう。

市域を地形によって区分すると、鶴見川及びその支流に沿った北部地域、柏尾川・境川に沿った南西部、これら二つの地域を分け、帷子川と大岡川をはさんで相対する中部丘陵地域の三つに大別される。鶴見川、柏尾川、境川を除く他の河川は、いずれも市内の丘陵地にその源を持ち、河川延長が短く流域面積も小さい。そのため平坦な場所は、河川の流域沿いと河口付近の浦や入り江、浜の地先を埋め立ててきた臨海部を含めても市域全体の約三割しかない。市内に広がる丘や台地は、最高の大丸山（一五六・八M）や円海山周辺を除くと、概ね海拔五〇〜六〇メートル程度であり、丘陵・台地には小さな谷が細かく刻

み込まれ、多くの谷戸を有する複雑に入り組んだ地形であることにその特色がある。

また、かつては複雑に入り組んでいた横浜の海岸線も、埋め立てが進み、現在では大きく三つに大別することができる。開港以降横浜の街形成を促した港を中心に、国の経済の根幹を支えてきた京浜工業地帯を含む一帯。昭和三十年代後半、根岸の浜を埋め立て工業立地が進んだ根岸湾。中国の瀟湘八景を模した景勝の地「金沢八景」として古くから知られ、現在は貴重な海のレクリエーションの場として人工海浜などの整備が進み、唯一の漁港が今でも残る平潟湾と金沢湾。それぞれが歴史の文脈の中で、時に景をめでられ、時に新たな役割を与えられ、そのつどそれに答えるべくあたかも年輪を重ねるかのように陸地を拡張し続ける中で特徴づけられてきた三つの海岸線である。

横浜では坂を歩いているうち、突然眺望が開けたり、向こうの丘越しにちらっと海や港が見える。台地や河川が作り出す微地形が、細かな生活空間を幾つも作り、見え隠れの中に空間の細かなひだを多く持つ。また海との関係も同様に、かつての浦や入り江や浜といった地形的な古層が、海岸部一帯のまとまりを方向づけ、海との接触の仕方も変化に富んだものとしている。そのため街の骨格が一目ではわかりにくい。

これと同じ港町神戸と比較すると、その地理的形状と街形成は大きな違いを見せている。神戸は北に六甲山地を背負い、海に平行して道路や鉄道が引かれ、それに沿うかたちで元町や三宮といった横長ではあるが、まとまり

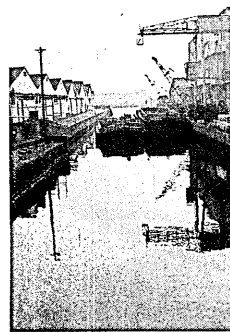
をもつた街形成がなされている。海と平行する軸と、六甲山へ向かって海に直行する軸の二つが街の基本的な骨格を形作っている。景観もこの骨格に従い、山から見下ろす方向と海から見上げる方向の二つが眺望の基本となっている。坂を下りると海が近づき、のぼっていくと六甲山が借景となつて、街路樹の緑がひととき美しい。そして街の新たな発展と拡大は、横浜のように地続きの埋め立てである必要もなく、前面の海に浮かぶ新たな人工の島「ポートアイランド」に神戸は夢を託したのである。

このように地形や場所には、固有の特性があり、その特性と人間が思い描く場所のイメージが一体の関係で響き合いながら街はイメージされる。この重なり合いにズレが生じない限り、それは魅力的な景観の場となるのである。

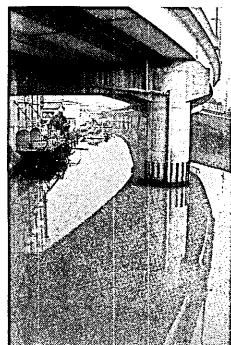
#### 4 空間の縁（ふち）

物の輪郭というのは人間の視知覚の特性とも関連し、最も記憶に残りやすいといわれている。空間についても同様なことがいえる。あるまとまりを形成する領域の境界部、すなわち空間の縁はその場所のイメージを方向づける上で非常に重要な役割をになう。海辺、水辺、ほと、たもと、山際、等々、空間の縁はまた景観を構成する重要な要素でもある。横浜の海岸線のほとんどが、工業の発展や物流機能の強化を目的とした埋め立て地で、海と街、海と人との直接的なふれあいを拒絶する带状の境界帯を臨海部が形成している。

ミナトもうひとつの景観



運河の上にかかる高速道路



しかし横浜の入り組んだ丘陵地の地形は、港や海を眺望もしくは遠望する場所を数多く持つことで、物理的な隔たりの距離ほどに、港や海への心理的距離は遠ざけられていない。「みなとみらい21」の水際の整備に代表されるように、市民が直接アイ・レベルで港や海と接する親水性の高い場所がいくつも誕生したことで、急速に「港街横浜」といった風景イメージが補強されつつある。港は空間の縁であると同時に、他の世界へと橋渡しする連結のイメージもあわせ持つ。この両義性ゆえ、港は多くの物語の舞台ともなる。

さらに、ベイブリッジやつばさ橋、ランドマークタワーとい高層の構築物の出現は、港に景を添える要素としてだけでなく、内陸部の風景にまで影響を与えている。三〇〇メートル近い建物は、良くも悪くも横浜の入り組んだ丘陵のいくつもの稜線を突き破り、かなり奥深いところまで港の方角を指し示すしるしとして様々なところで顔をのぞかせている。河川や運河もまた都市の中で緑空間を形成している。物理的には場所を切り分けると同時に、見通しのきく空っぽの空間を都市に提供してくれる。それに架かる橋は境界と入り口といった異なるベクトルを併せ持つ両義的な場所であり、結節点としてきわだったところでもある。かつて橋のたもととは情報や物の交換の場所でもあった。今でも橋は様々な表情を持ち、街の風情をかもしたしている。

ややもすると交通の障害物として、やっかいものの扱いを受けてしまいがちな橋ではあるが、景観の要素としてまた場所の特異点として橋の魅力を掘り下げたいものである。

昭和三十年頃まで、横浜の丘陵・台地と流域沿いには田畑や山林が広がり、その面積は地域の八割を占めていたといわれている。その後、急速な都市化の波に洗われ、これらの土地は住宅開発の適地とされ、次々と大規模な開発が進み台地や丘陵の斜面は住宅に取って代わられた。さらに数年前までのパブル経済期、わずかに残った貴重な緑の資源であった急勾配の斜面緑地も削り取られ、マンションが斜面の前面に屏風状に立ちはだかるといった光景が目につくようになってしまった。丘陵の稜線を飛び出し、人工の構築物が新たな稜線を形成し始めている。

この山の稜線に沿ってはしる尾根道も入り組んだ谷戸のまとまりを区分する境界、すなわち空間の縁でもある。丘陵地の道は地形に従うことで曲がりくねり、平坦地の道のわかりやすさとは対照的である。尾根道から見え隠れしながら得られる眺望や、丘の鼻からの見晴らしは変化に富んだものとなる。また丘陵や台地と平坦な場所を繋ぐ坂は、境に通じる境界のしるしでもある。その周辺のイメージや眺望の特徴、言い伝えや物語など、坂には様々な名称がつけられ場所のしるしとなっている。市では道路や坂道にその土地で呼び慣わされてきた名称などをもとに、愛称をつける事業を市民参加で行っているという。場所を形成する特異点として、坂を魅力あるものに育て上げていく最初の一步かもしれない。

中村良夫氏は「風景学入門」の中で、縁の魅力とは「物のまわりをかすかにつつんで物をひきたたせる寡黙の力」にあり「予兆と両義性の面白さ」にあるという。横浜はその地

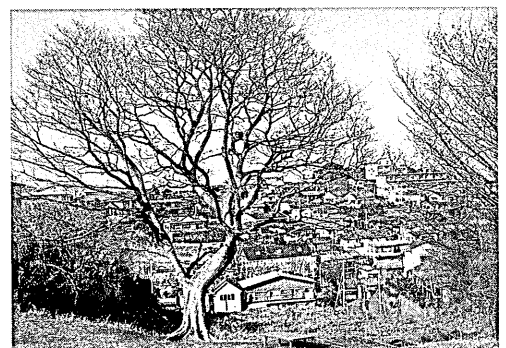
理的特徴からこの空間の縁を数多く持つ都市でもある。空間の縁をいかに仕立て上げていくかが、これからの横浜に問われるところでもある。

### 5 一景観から風景へ

景観とは眺められる対象やモノである「景」と、眺める主体の意志である「観」の両方を指し示す言葉からなっている。オギユスタン・ベルクは「日本の風景・西欧の景観」の中で、西欧の景観の成立過程は風景の対象化であり、それは遠近法を生んだ主体と対象というきわめて近代的な観念に由来するという。今世紀初頭から始まる近代の都市計画も、ある意味で場所から開放された白いキャンパスの上に、空間と機能を手がかりに対象としての都市を自由に構想するところから出発する。ややもすると、都市の利便性と機能が優先し場所の特性をねじ曲げ、まとまりのイメージや魅力的な景観の場を見失う方向で整備が行われてしまう。

景観から風景へと向かうベクトルは、対象化し抽象化した都市をもう一度人間の生活の場所の延長に引き戻す作業でもある。場所の特性は人間に対して独立に存在するものではなく、人間のイメージによって風景として発見されるものである。ここに発見される特性は人間の感性や精神の特性に基づいて発見されるものであり、きわめて文化的な問題でもある。同時に、形成されたまとまりのイメージは人のアイデンティティを保障する見えないなわばりの役割をはたす。人はそれを所

谷筋を望む眺望の場所



足もとの景観整備



有することで場所に錨をおろし、広がりの中へ出て行くことができるのである。

奥野健男氏は「文学における原風景」の中で、都会に育った彼が見つけた自己形成空間（＝原風景）が「原っぱ」や「路地」であるという。彼は自分と同一化しなごんだ心象風景、生活空間の象徴を原風景と呼んでいる。「原っぱ」や「路地」は、かつて都市で生まれ育った誰もが共感できる懐かしい場所として存在していた。それは心の中の風景（原風景）として繋ぎ止められることによって、絶えず移り変わる都市の中で生活することの不安から解消されるいわば原点ともなる。そのため、原っぱという言葉の響きの中に様々な思いが重なりあい、結果として濃密な場所の記憶に満ちた中心の場所としてそれは懐かしく思い出される。

幼児から子供、子供から成人へと成長していくプロセスは、守られ庇護された世界から外に出ることで自分を発見し、社会という広がり新たな関係結び、安定化を指向し続けるプロセスでもある。生活空間との関係でいえば、空間に意味を持たせ場所を獲得し、しるしづけていくことによってそこをイメージの中で囲い込み、同化することで安定を見出し、出ていく過程ともいえる。しかもそれは成長とともに動的な広がりを持ち、たえず調節を繰り返しながら拡張されていく。

私の記憶の中にある、様々な場所をもう一度思い返せば、生まれ育った場所を中心とした、生活空間の縁にすべてが関連していたようでもある。坂や眺望の場所、運河や海際は、閉じた世界を形成するためにしるしづけられた特徴的な場所であり、それらをイメージの

中で繋げていくことによって私の中の横浜が像を結ぶ。

オギユスタン・ベルクは、風景というものは、文化的アイデンティティーに関するきわめて確かな指標であるといい、さらに個人のアイデンティティーを保証するものでもあり、環境を構成する事物の外的側面が、その環境を整備した社会の様々な性格を表すという。丘と海によって形成される細かな空間のひだの上に成立する都市横浜を、景観から風景へと定着させていく手だてはいかにあるべきか。

街づくりにおいて地形や場所を持つ固有の特性を発見し、生活の中で創造的に組み込んだ場所を育む努力が求められている。

△「横浜学」を考える会会員、神奈川県大学工学部建築学科主任教務技術職員▽

夜の風景を演出するライトアップ

